



TITLE:

<批評・紹介>柳田節子著「宋元社會經濟史研究」

AUTHOR(S):

梅原, 郁

CITATION:

梅原, 郁. <批評・紹介>柳田節子著「宋元社會經濟史研究」. 東洋史研究
1997, 55(4): 787-794

ISSUE DATE:

1997-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155028>

RIGHT:

批評・紹介

柳田節子著

宋元社會經濟史研究

梅原 郁

編集子が柳田さんの近著の批評と紹介を私に依頼してきたのを憶測すると、几帳面な柳田さんが、本書のそこそこで拙稿を論評されおられ、その反論の場を與えてやろうという親心かも知れぬし、また、柳田さんがその學問の根底を形成された時代の雰囲気、ほぼ同時代を生きた私なら、實感として持っているだろうという配慮があるのかも知れない。前者について言えば、柳田さんの私への批判の多くは的確ではあるが、ただそれらは、全面的にこちらが誤まりを認めるといった性質の問題とやや異り、より廣く、考え方や立脚點の相違と不可分なケースが大部分を占めている。従つて、それらに對する私の見解は、然るべき場所で纏めて行なうべきかと思うので、本稿では個々の問題について特に觸れぬことにした。後者について言うと、實はそこにはかなり重要な意味がひそんでいるかと思われる。柳田さんの諸論文の基底には、戦後のある時代をリードした歴史觀、その時代の學問的情況といった、それ自體が今から見れば歴史的產物であるものの影響が、色濃くカゲを落しているように感じられる。そうした點にも留意しつつ、當りさわりのない紹介に終らぬように心して責めを塞ぎたい。

ほぼ十年前の一九八六年、柳田さんは、それまでの研究の集成ともいえる『宋元鄉村制の研究』を同じ創文社から公刊された。そこでは、地主・佃戸關係が基本的生産關係をなすと柳田さんが想定される當時の鄉村において、必ずしも全面的に地主の支配下に組込まれていない、廣範な自作農にも目を擴げ、それらすべてが戸等制を通じて、どのように宋朝の國家支配のもとで掌握されていたかという、いわば縦の面と、地主・自作農・佃戸が現實の生活を展開する鄉村の場にあつて、どのような共同體關係を成立させていたかという横の面が、さまざまな角度から丹念に追求されている。この書物で論じ盡されなかった問題や、その後に發表された論考などを、柳田さんは大學を退休される機會に、再度纏めようと企圖され、それが若干遅延したとはいえ、ここに『宋元社會經濟史研究』の名を冠し、索引を含めて五〇〇頁の大著として上梓される運びとなった。まことに慶賀の至りであるとともに、同じ時代に關心を寄せる後學の一人として、柳田さんの學恩を常時座右で受けられる有難さを改めて感謝する次第である。

さて、本書の全體は、著者自身によつて三つの篇に區分されている。第一篇「宋代土地所有制と專制支配」には、一九七〇年の後半から八〇年代前半に執筆された諸論考がならぶ。そこには、宋代の直接生産者の一つ、地客・傭耕などの性格の究明、その位置づけをめぐる論議の一環として書かれたものを始め、國家・官僚・商業など、いろいろな視點を通して、いわば間接的に地主・佃戸制の性格を探ろうとする試み、あるいは都市の戸等制など、全部で九篇が収録されている。續く第二篇「宋元史諸論」には、八〇年代後半から九〇年代前半にかけて書かれた四つの論文が含まれる。このうち四番

目の「元朝廷下中國農村社會における回民」を除くと、あとは女性問題、特に法制史とかかわる、女子と財産に焦點をあてた最近の研究が中心になっている。「宋元史研究の動向」と題された最後の第三篇には、柳田さんがこれまで執筆された學界展望と書評のうち、主要なものが邦人八篇、中國關係三篇にわけて集められている。これらはすべて、最初に述べた柳田さんの考え方と活躍されてきた時代を知る上で、極めて意義深く、本書の價值を一段と高めていると私には感じられる。この三つの篇は、斷わるまでもなく、相互に密接に繋り、とりわけ第三篇の諸論を媒介にして、他の論考を読むと、柳田さんの學問が、より身近かな血の通ったものとして理解できるのではないだろうか。以下、各篇の内容を紹介しつつ、若干の私見を書き連ねることにしたい。

第一篇は九つの論文から成る。私の便宜に従い、時に順序を變えてとりあげることをお許しいただきたい。冒頭に置かれた「宋代土地所有にみられる二つの型——先進と邊境——」は、六十年代後半の、この論集では最も古い時期の作だが、それだけに柳田さんにとって想い出深いものなのであろう。宋代の土地所有制をめぐる周藤吉之、宮崎市定兩氏の相對立した見解を、地域差という視點の導入により、二者擇一でなく理解できる方向をまざろうという、それは一つの試みでもあった。江南デルタ、すなわち當時の兩浙路に對する荊湖南北路と四川、巨視的に言って先進と邊境、狹郷と寬郷の類型で括られる二つの地域を對比させつつ、地主・佃戸間の身分隸屬度の強弱、直接耕作者の土地への緊縛度、さらに頭佃抗租の動きなどの差異が検討されている。この論文については、すでに幾つか論評があり、とりたててそれらにつけ加える意見はない。ただ「地

域研究」という文字が、近來ごく安易に使われ、何のための地域研究かという基本問題が等閑に付され、個別細分の混亂を矢鱈に助長している點を改めて戒めておく必要はあろう。

「宋代の地客」と「宋代の雇傭人と奴婢」と題した第二、第三論文は、高橋（津田）芳郎氏の問題提起への批判が中心となっている。佃戸を筆頭に、僕・奴などとして宋代の資料に現われる直接生産者は、基本的にはすべて自由民で、奴隸・農奴といった身分的隸屬關係から解放たれていたとする宮崎市定、草野靖氏の考えを一方の極に置くと、地主・佃戸間には「主僕之分」で代表される、身分はもとより法律上でも隔差が存在し、當時は中國における奴隸制から農奴制への移行・成立期だったと考えられる周藤吉之、仁井田陞氏らは對極に位置しよう。柳田さんは、基本的には後者の立場に立ちつつも、なお、周藤・仁井田兩氏の論證や考え方だけでは説明し盡せぬ部分があるとして、本書でもとりあげられているような、幾つかの副次的要素を通して、基本的生産關係とその上部構造をより適確に捉えようと模索を續けられているように私の目には映る。この後者の考え方に親近感を持つ研究者たちは、周藤氏の丹念に蒐集、發表された史料をもとに、たとえば直接生産者の、小作（佃戸）、傭耕（雇傭人）、あるいは奴隸耕作者（奴婢）といった範疇作り、乃至はその生産體系の中での位置づけをくり返している。そうした中の論客高橋芳郎氏は、法的身分という切口を用意して、この問題に一石を投じられた。氏の論點は次のように要約できよう。①宋元時代の「奴婢」身分は、犯罪・捕虜によつてのみ生じ、一般の資料にあらわれる奴婢はすべて雇傭人と見做せる。②彼らは主家に同居し、その家父長的家内奴隸というべく、主家との間に「主僕の

分」があり、主家と典契・雇契を結ぶ良民である。③通常の地主・佃戸間は租契で結ばれ、彼らの間には「主佃の分」がある。ちなみに高橋氏の考え方では、宋の文獻に登場する「地客」や「佃僕」と呼ばれる人たちは、身分範疇としては「雇傭人」に含まれることになる。柳田さんの「雇傭人」の論文は、高橋氏のそれに先立って發表されたものだが、のち改訂を加えられ、「地客」の論考と合わせて高橋氏への批判の型をとっている。その要點をこれも列記しよう。①「地客」史料の分析では、それを主家と典契・雇契によって結ばれた「雇傭人」身分の範疇で把えるのは無理である。②「主僕の分」と「主佃の分」は必ずしも明確に區分できない。③一口に雇傭人といっても國家から「客戸」として捉えられ、乾食鹽錢や身丁錢などを賦課されている傭耕や傭客などは、多く地主と租佃契約を結んでいた可能性があり、彼らと、家内労働者の、主従同居の僅使・人力・女使は區別して考えるべきである。

高橋氏が提起された「奴婢」と「雇傭人」の法的身分規定の考え方は、傾聴すべき内容を含むと私も思う。しかし、そこから氏が展開する議論を、兩宋三百年の歴史事實と整合させる局面になると多くの疑問が生じる。柳田さんも言われるように、「主僕」の分「主佃の分」「尊卑の分」そして「主奴の分」といった用語の取扱いや意味のとり方一つにしても、かなり強引な解釋が目につくのは否めない。ここで兩氏が扱っておられる宋代の雇傭人の問題、とくにその法的身分、法制的位置は、今後さらに、地主・佃戸制をはなれて、いろいろな角度から精密に検討されるべき重要な課題であろう。とりわけ、『唐律』で明確に段階づけられている、奴婢(賤)、部曲(半賤)、良民の身分規定を、立前と現實の兩面から跡づけつつ、それ

らが宋代に至ってどのように變化したかを、少し廣い視野に立って追求してみたい誘惑に私も駆られる。

ところで柳田さんは、周知のように、宋王朝の人民支配は、從來の個别人身的な丁の支配から、新しく戸の支配へと變化し、それが具體的には戸等制の形態で實現したことを強調される。柳田さんの場合、それは、明清時代の展開も視野にいれた、舊中國理解の重要な柱になっている。しかし、別の理論體系を持つ島居一康氏などはそれに對して批判的見解を開陳しておられ、確たる理論體系の缺落している私とて、別の立場から必ずしも贊意を表しがたい。それはさて置き、前著の一章「宋元王朝の鄉村支配體制」では、この戸等制が論議の中心に据えられていた。本書第一篇の最後におかれた「宋代都市の戸等制」は、その補説といつてよからう。すなわち、農村と同じく、都市居住者(坊郭戸)にも十等の戸等制がしかれ、それは彼らに多様な諸負擔を課する媒體となっていたことを論じ、改めて宋代の戸等制が都市・農村を併せて統一的に人民を掌握支配しようとする體制だったとの主張がくり返される。宋代都市の戸等制は、現在のところ、史料の制約から、その詳細が明らかでなく、この論文でも、特に目新しい発見があるとは言えない。ただ、ここで挙げられている、北宋中期以降、戸等決定の基準となる、家業錢や物力の内容の變遷とその背景や、あるいは地域別の差異などについては、今後そこから重要な事柄が引き出し得るのではないかと考えられる。

この家業と物力の問題は第四論文の「宋代農家經營と營運」とも無關係ではない。ここでは、宋代の中小自作農や佃戸らが、ひたすら土地にしがみついて生きていたといった想定は事實に反し、とく

に下等零細農民層は土地だけでは再生産が成りたらず、營運—商業が不可欠な要素として取込まれていた。ただそれは餘剰生産物の商品化、農村一般の富裕化という方向では理解できず、却ってそれを生む農村の貧富の矛盾を擴大したと述べられ、地主・佃戸關係、就中兩者間の隸屬・被隸屬の關係は、土地所有關係以外に、こうした商業を通して矛盾が造成、促進されたのではないかと想定される。

農民の副業的營運と次元は異なるが、同じ時代の支配階級である士大夫官僚と營利の問題が、第七論文「宋代官僚と商業行爲」で獨立してとり上げられている。士大夫の倫理的立前からすれば、彼らが直接營利事業に走るのは禁止されていたが、現實にはそれは日常・普遍化していた。柳田さんは宋の集權的官僚に内在する問題として士大夫の營利を追求せよとする。ここでは、宰相や三司周邊の高官を始めとして、官僚たちの國都開封での倉庫業や、買撲酒場などの專賣事業、あるいは商稅免除の特權を利用した商業行爲などの實例を列擧されたのち、彼らの職權を利用した商販營利は日常化しており、罪の意識は薄く、それを禁止する法規は事實上空文化化していたと指摘する。かかる營利活動の中心は遠隔地商業で、大量の物資の移動が集權的宋朝國家の手に基本的に握られた状況では、官僚の商業行爲はそれに寄生して營まれると結論づけられる。この二つの論文で提示されている事實は、必ずしもこゝまた目新しいとは言えぬ。問題はやはりその位置づけであろう。日本の封建社會とは大きく違い、官僚・地主・商人、換言すれば政治・土地・商業が三位一體化した宋以後の中國社會において、三者が時代によって如何なる性格の位相關係を持ち、それらの絡み合いが、他の歴史世界と異なるどのような特色を生み出しているかが、より判り易い言葉で説明

されるべきだと思う。それはまた柳田さんの出された問題を踏み臺として、今後こうした研究を展開してゆく者の心すべきことではないだろうか。

第五論文の「宋代地主制と公權力」でも、柳田さんは、地主・佃戸の内部だけに視野を限ることをやめて、王朝の公權力という要素の導入を試みられている。その内容は、官戸・形勢戸（大土地所有者）への國家の土地規制たる限田法、「割佃」すなわち小作權のとりあげに際する公權の役割をはじめ、從來しばしば論議を招いた地主・佃戸間の隸屬性をめぐる問題も、視點を變えれば、兩者への公權力の介入という事實が垣間見られるといった注目すべき發言が含まれている。それらは一言でいえば、耕作者獲得をめぐる國家と大土地所有者の争いであり、公權力は地主が佃戸を自由に支配せぬための働きかけということになる。また頑佃抗租にしても、その多くの史料は彈壓の主體が公權力であることを示し、抗租運動は地主より官府を相手に闘われた。結局は、地主側にも公權力の踏込みを許し、權力に依存することなしには佃戸を支配し得ない弱點を内在させていたのではないかと柳田さんは自問しておられる。公權力の介入乃至は援助なしには自立し得ない地主・佃戸制というのは、では普遍的な發展段階説の中に位置づけられる性格を持つものなのか。そしてそれが宋代の基本的な生産關係として上部構造を規定するとなれば、我々はその具體的なイメージをどう頭の中で組立てればよいのか。商業にせよ公權力にせよ、史料に即した柳田さんの説明はいちおう判るが、それが地主・佃戸制とどういう風に内部で必然的に結びついているのかといった、必要・十分條件が私には、まだよく見えて來ないのである。

王朝権力と官僚形勢戸など大土地所有者の利害が一體化し得ない具體例として、官田を材料にそれを検討した第六論文「宋代の官田と形勢戸」には、今後論議の出発点となるべき重要な指摘がなされている。従来の論者たちは、「割佃」すなわち小作權の強制的とりあげを、宋代佃戸の歴史的位置づけの一指標として議論を重ねてきた。しかし、公權力と大土地所有者の間のズレに注目された柳田さんは、割佃の史料が官田に集中している點の再検討を通して新しい考え方を提示される。南宋に入って多く出現する、營田、沙田、蘆場、あるいは學田などの官田の承佃者を、柳田さんは第一次的には官戸・形勢戸とされる。彼らの官田に對する廣大な包占や小作料の不拂いを解決するために、その承佃權を別の者に移讓する行爲が「割佃」にはかならない。そこでは、割佃權の行使者は官で、被割佃者は形勢戸などの豪民層、そして割佃によって次に官田の承佃者となるのは耕作農民というパターンとなり、要するに官田割佃の多くは、王朝権力の形勢戸層への支配權の行使というところに落着く。同じ割佃といっても、形勢戸に對する割佃と、直接生産者である佃戸に對するそれとは同一に論じられぬことは柳田さんが仰言る通りだろう。宋代の官田を對象とした研究は幾つかあるが、私には柳田さんのこの論文が最も理解しやすく、かつ將來への基礎となる内容を持つと思う。第一篇で残った第十論文の「宋代の縣尉」は、專制支配と人民の接点にあつて捕盜を職掌とする縣尉が、宋代では圍田の開掘や西湖の管理、あるいは土地關係の裁判などにその關與を擴げていた事實を指摘した小論である。

「宋元史諸論」として第二篇にまとめられた四つの論文のうち、最後の「元朝治下中國農村社會における回民」が『元典章』に見え

る福建での資料を手掛りに、農村内で漢民族と日常的に接している回教徒が、どのような生活と感情をもつて暮らしていたかを探ろうとするユニークな一篇であるのを除き、他は、女子の相續、財産權を扱った興味深い内容を持つ。

南宋の判語集『清明集』には、女子が男子の半分の財産を取得できる規定を始め、戸絶財産の女子承分の詳細かつ明確な法規が存在する。その解釋、位置づけをめぐり、仁井田陞、滋賀秀三兩氏の見解が對立していることは良く知られている。柳田さんは「南宋期家産分割における女承分について」で、關連史料を逐一検討されつつ、滋賀氏のいう、女子分法は「慣習から遊離した存在でしかなく、舊中國を貫く、男系の承繼と祭祀義務の基本的原理からして、それに消極的意義しかつけられぬ考え方に不満を表明される。女子承分についての宋代の法規定は、さまざまな制約を伴いはするが、「一定の女子財産權として積極的に理解したい」と柳田氏は述べられ、それが明清時代下降の方向を辿るのは、「朱子學の教化の過程で、法的に相對的に低下して行つたのではないか」との推測を下される。こうした問題が宋に續く元代で、どのように變化したかを『元典章』を中心に跡づけられたものが「元代女子の財産繼承」である。元代の女子の財産繼承は、基本的に宋代を繼いだと考えられるが、未成年女子が潜在的に戸を繼承する事例などから、元朝にとっては、中國的な繼承の觀念よりは、當差戸の擴大・確保の方が重要だったのではないかといった推定も加えられている。なお蛇足かも知れぬが、この論文の第二章で引用されている『元典章』の読み方が氣になる。それは官が戸絶となつた土地を管理下に置き、租佃させることを述べる箇處で、「官爲知在毎年依理租賃」とある原文を「官爲

めに知す」と切り、「知す」について別注で説明を加えておられる部分である。宋元時代の幾つかの用例からみて、ここは「知在」と續けて讀む方が妥當であらう。

いま一つの「宋代の女戸」は私個人にとつても興味のある主題である。唐から元に互る文獻に散見する「女戸」は、最初主客を分たずと稱せられる段階から、次第に主戸として兩稅負擔者となり戸等制に組込まれる。また王安石募役法時代には、半額の助役錢負擔者としてしばしば登場し、南宋には有力者の詭名挾戸の方便に利用されるなど、いわば點としての史料は散見するが、それらを綜合した明確な像はまだできてはいない。柳田さんのこの研究は、制度的考證と同時に、女子の財産權の成立と絡めて論じられた所に特色がある。

すなわち、女戸として立戸する條件は土地所有にあり、女子が經濟的主體としての女戸を立て得た背景や、それが必ずしも寡妻に限らなかった點などを勘案し、それらと宋代の女承分をつなぎ、寡婦以外に離婚によつて男の財産を受取つた女、女子分法で父から財を貰つた在室女も女戸を立て得たと論を展開される。こうした女子の財産權を基礎に、上述したように、政府は女戸を主戸として戸等制に含め、兩稅などの課稅を行つたという結論になる。私はこの柳田さんの考え方には賛意を表しかねる。少くとも宋初の差役法時代は、女戸は單丁戸とともに役法の除外枠とされ、主戸ではあつたろうが、おおむね貧窮というのが通念のように思われる。熙寧四年、蘇軾が萬言書の中で、「女戸と單丁は蓋し天民の窮する者なり」と書いているのは、當時の一般的感覺をそれほど歪めた表現とは受取れない。ところが、役法が絡むと、有力戸がいろいろな形の女戸を人為的に創り出し、それらが助役錢の對象となると、戸等が問題にな

つてくるだらう。そうした所へ現代的な意味を感じさせる女性の財産權といった概念を導入すると、とかく歴史事實と異なる議論に走る恐れがありはしないだらうか。

柳田さんのお叱りを蒙ることを承知であえて言えば、女承分について、私はやはり滋賀氏の言われる男系血族中心の家族制度と繼承・承分が、原理、いいかえれば立前として嚴存することを前提にすべきだと考える。しかしこの原理には中國社會の歴史的展開、多様化と複雑化に伴つて、それこそ枚舉に暇のないほど矛盾が生じる。

従つて現實に對應する諸政策——たとえば女承分で劉克莊の引用する「法」——が、可能な限り理念を修正する方向で出される。だが、必ずしもそれは理念の變化を意味しない。理念を時に應じて、皇帝が「敕」の形式で現實法規的に解釋し、言葉は悪いが便宜的に順應させているにすぎず、立前を變える性格のものではない筈である。

戸絶の家に在室の女が残り、嫁した女子がその時々々の現實的條件にもつて財産を自分名義にしておくことは、宋代の先進地域では別に珍らしくはなく、それを唐の「律」の立場から縛つては、行政は身動きができなくなるにまぎっている。戸絶が生じたからとて、全部が全部國が財産を沒收するといった杓子定規さは、決して「人情」に適合しないだらう。宋代の女子の承分問題はたとえて言えば、最近の「社會主義市場經濟」のそれに似て、本來の理念からは乖離していても、現實と理念の調和のためには必要な手段だった。従つてそれは次の時代、より廣範で高次な理念の綜合的修正が行われると、その姿を消してゆくことも當然あり得るであらう。

最初にも觸れたが、本書全體の四割ほどは、十一篇にのぼる學界展望と書評を集めた、第三篇「宋元史研究の動向」で占められてい

る。柳田さんが「或る意味では、論文執筆よりはるかに緊張感を味わい、身構えて書いたものばかりである」と告白されているように、内容的にも論文とくらべて軽いものではなく、繰返しになるけれども、柳田さんの學問の骨子を理解する上でも、また本書のところに第一篇の諸問題と深くかわっている点からも、極めて重要な役割を擔っている。少し餘談めくが、最近の若い研究者の書評を読んでいると、とかく自己中心的で、相手を尊重する氣持が少く、それでいて別に目新しくない自分の主張だけを攻撃的に列べているものが目立つ。柳田さんが書評を書かれる時の姿勢を、老婆心ながら若いあなたがたに是非學んでほしいと思う。

十一篇の文章のうち、初めに置かれた「宮崎史學と近世論」と、草野靖氏の學説を取扱った「宋代佃戸制の再檢討——最近の草野靖氏の見解をめぐって——」、「草野靖著『中國の地主經濟——分種制』がまず目をひく。前二者が、柳田さんと學問の流れの近い、かつて「歴研派」と呼ばれた人々が中心となつて活躍している雑誌に發表された事實が物語るように、それは單に柳田さん一人の意見を超えて、志を同じくする研究者の空氣をも、いろいろな形で反映していると私には讀みとれる。さらには、これら動向は、人民共和國の成立・發展と同時に並行して、強い影響力を多くの若い中國史學者に與えた唯物史觀の發展段階説が漸く沈潛に向い、大學紛争や文化大革命をへた時期に書かれている點にも留意せねばなるまい。宮崎先生の東洋的近世論にターゲットを絞った柳田さんの批判は、一字一句に神經が使われ、それが讀む方に痛い程傳わるのだが、長年先生に親炙して來た私には、批判が必ずしも生産的なものとは思われぬし、話しが結局こういう形で噛み合わないだろうとしか言ひ

ようがない。一九九一年十二月に「圖書」に書かれた柳田さんの短文「宮崎さんのしごと」を見ると、そのことは柳田さん自身もよく判つておられるのだろうという印象を強くする。宮崎先生の大作「中國」という繪から、近世」という一部分だけ抜きとり、別の「生産關係」という繪と比較することは所詮徒勞で、その逆もまた眞ではなからうか。それに較べると、草野氏への批判は、著書の中の史料を中心に具體的に判る形で行われているため、遙に理解しやすい。「唯物史觀がお嫌い」とレッテルを貼られている私も、これまたホボ同世代の草野氏が主張される、「中國史の眞の理解のためには、借物の範疇を捨てて、自前のものを持たねばならぬ」という氣持だけは強く抱いている。草野氏が、その實踐として、宋代以後の地主經營を體系的に理解するため血のにじむ努力を續けられていることには深い敬意を表するにやぶさかではない。にもかかわらずそこには、柳田さんが指摘されるように、史料の讀み方と解釋に首をかしげざるを得ない部分や、客戶の定義などに見られる強引さが少からず存在していることは私も同感である。今後、こうした方面の研究に志される若い方々は、短兵急に、史料を自分にひき寄せて解釋することに行き過ぎないよう、柳田さんの批判を十分に咀嚼して、草野氏の出されている問題をふくらませて行つていただきたいと思う。

書評の中で私が個人的に興味を持ったのは、柳田さんの師である周藤吉之氏の『唐宋社會經濟史研究』の評である。流石に書きにくそうで、全體が周藤氏を中心に据えた、當時の社會經濟史の問題點の羅列という恰好になっている。この書評が出たのは一九六七年、それから三十年を経た現在、ここで取上られた問題點の多くは依然

未解決のままで、「周藤氏の巨大な研究の體系のどこへでもぶつかつてみることなしに、宋代史、さらには中國社會經濟史の研究は先に進むことはできない」との柳田さんの言葉はいまも生きている。それを曲りなりにも試みておられるのは、柳田さんから厳しく批判されている草野氏ぐらいというのも皮肉な話である。

以上四篇に續き、吉岡義信著『宋代黃河史研究』、中國史研究會編『中國史像の再構成 國家と農民』、谷川道雄著『中國中世社會と共同體』、愛宕松男著『東洋史學論集』第四卷 元朝史の四篇の書評がならぶ。それぞれに啓發されるところが多いが、最後の愛宕氏への書評は柳田さんの別の側面をつきつけられた感じである。唯物史觀の金縛りから離れた柳田さんの史料解釋は、のびのびとして説得力があり、まさに「ワザあり一本」と叫びたくなる。

第三篇の最後では、「一九五〇年代の中國における宋代土地制度研究——華山「關於宋代の客戶問題」を中心として——」、「一九七〇年代の中國における王安石評價をめぐって」、「一九七〇年代の中國における宋代農民戰爭研究——方臘起義を中心として——」の三篇の動向がまとめられている。すべて興味深く、かつ重要なテーマであり、我々が中國の研究を参照する時の役に立つ道案内であることは疑がない。ただ、同じ唯物史觀の次元に立つ柳田さんも、その時々政治が微妙に絡む中國の學者たちの論文を扱うのに些か難澁しておられる様子である。それはまた彼我の學界と學問の違いを我々に無言のうちに物語ってくれているわけでもあらう。

物議を醸すことを承知で言うと、私は個人的に宮崎先生は通史的、綜合的で、周藤吉之氏は斷代的、個別的であると思つている。また柳田さんとかかわり深い仁井田陞氏は、時代累積的、特殊のと

勝手に範疇づけている。これはそのかたがたの學問内容の價值づけとは毫も關係ないことは斷わるまでもない。そうした分類に唯物史觀(的)か否かという、これはまた別の、全く違った要素が重なり合う。宮崎先生の學恩を直接受け續けて來た私と、周藤・仁井田氏に私淑されて來た柳田さんとは、世界觀、歴史や中國への考え方が大きくかけ離れているのはむしろ當り前で、強いていつも同じ土俵で學術的論議を闘わせなくても一向に構わないはずである。現にこの批評・紹介でも柳田さんの側から見れば「慮外者」的發言で大半がうずめられているであらう。ただ、戦後、柳田さんもその有力な一人である、周藤吉之氏を中心とした宋代土地制度史の實證研究が、かつてなく細密に推進され、極めて大きな成果を挙げたことは何人も否定できない。問題はその成果のどの部分を抽出し、中國史全體の中に、借物でない研究者本人の考え方で位置づけ、さらには仲間うちのむづかしい用語をやめ、誰にでも判る言葉でそれらを説明することであらう。

一九九五年十月 東京 創文社
A五版 四七一頁 索引一三頁